

俳諧七部集

津田文庫

文庫 1

1631

1

10

15

20



早稲田大学  
図書館蔵書

つだ文庫

010190600918







春乃日

喫見んとくく戸打もあひて舞田のうらみはな  
波一糸さうくちりのゆははなまの方より念え  
いよもなる重なる枝折をけり行境をくらまふ  
ぬちよりけはのなまをねのひねる

二ノ月十八日

まゝめくやんさめくの何勢あり  
さくらちる中ぶをくく連  
山くすむ月一何の飯まき  
鐘なまらの火まはゆるなり  
ま不風よましくは笑ひを

荷

重五  
兩桐  
李風  
昌圭

今更ふ仲の山名あく見え  
頃大ちふけれ時ふ境久ん  
ましくいささくはなまのくく  
文王乃をきふけふもふり  
雨の飛名角れかまき草  
乳室のみ一度ハ背をかき景  
傾城乳とくく辰辰辰辰  
旁とらふ後ふ人の影後  
くまくとこのく神楽くく里  
ちをけり守た更ハ砂りて  
花うりま男の盛名わくく此  
肉よき陰そあくらふ鞠の目や

乳  
重五  
荷  
李風  
兩桐  
昌圭  
雨  
重五  
昌圭  
李風  
重五



入りては 月午 露いそくあり  
 くらりりと暮らみくし 家連結せ  
 久不懐り 梓きく ぬれ  
 黒髪とあふあふなるかき切ゆ  
 いそりうしきく 又後乃汁を  
 夢はゆふこ 官言の 門ハらるるを  
 ちうの 跡も 見入ぬ 河を  
 物網 互腐を ちうふらう 道ける  
 念伴 さふり 秋の 道なる  
 積夢 生ふ 夢を 伝へ 傳へ  
 ころ 名を 橋の 名 くらる 月  
 今此 月も なる 雨の 昏れ

荷兮 李凡 雨相 昌圭 重五 李凡 重五 昌圭 雨相 昌圭 重五 李凡

物懸 ちうく せうれ かくく  
 伝へく ちうく 雨行 なる ちうま  
 切疑 の ちを 二く ちうく ちを  
 世々 伝へる 馬の 伝へ 年々 ちう  
 紀念 なる ちうく 伝へ 傳へ 首 柳  
 いそりう ちうく 伝へ 傳へ 首 柳  
 牙も せうれ なる ちうく ちうく

雨相 荷兮 昌圭 雨相 重五 昌圭 李凡

三つす 六月 野の 亭に ちう  
 本や 巨塔 ちうく 山の 八重 ちう  
 おりて ちうく ちうく ちうく ちう  
 其れ 橋 ちう 供 ちう ちう ちう

止景 野水 荷兮



口きく 言清めをうけ  
きんたしむる世の世の酒の枝  
賣のこころまふる月  
まの白き太巻なふるふけり  
まのの 酒よよ子目さめく  
表町あらうて二人髪利ん  
曉りまふるま けくす  
勢着ふそて大なる度入まけ  
らやう 國んこふ ぶのまふ  
旗衣あふそとをむそふ  
扶ゆこふそとをむそふ  
甲人年 樽と勢と持の酒

越人 羽笠 靴水 且葉 越人 前兮 越人 且葉 羽笠 靴水 越人

月からき 宿り 書きとく 旗  
あふそとをむる木の根にけの勢  
根をそとをむる 湯のふ  
のこころや 旗の勢 勢の勢  
内侍ハ せふ代々の肩は同  
物思ふ 軍の仲ハ けくす  
名も うち 葉とち けくす  
大なる 念ふともふる 旗の勢  
のの せふをむる けくす  
おの せふをむる けくす  
宮古よ せふをむる けくす  
一 旗くす せふをむる けくす

羽笠 靴水 且葉 越人 前兮 越人 且葉 羽笠 靴水 越人



さへ想まのりさけん月  
湯をのりえのうらま輝を  
まふ雨 神り 心赤りさく  
田ぬらして花さる里に生け  
ちるの心動をつま 中ぬみ  
ほや三井乃 末の心さうよ  
ちるくののみを ちるの心く  
思ちけらう 井の泉の思さ  
君乃つらも ちるの心く

且葉 越人 荷分 田盆 井水 且葉 越人 荷分 田盆

三月十六日 且葉 田盆 水  
越乃とさうてゆきまはる

水

家あつる ちるの心く  
藤さう ちるの心く  
ましく ちるの心く  
ましくのり 渡一の舟月形  
茅の穂を ちるの心く  
残きり ちるの心く  
岩の洞より ちるの心く  
雨の月も 籠庵やん ちるの心く  
ちるの心く ちるの心く  
解てや ちるの心く  
今西月 更へて ちるの心く

且葉 越人 荷分 田盆 井水 且葉 越人 荷分 田盆



同十九日 荷兮室ゆく

嘆くよけのさうらへんがき白雲を  
我乃 ねる子 くるり 頃  
秋丁のさきまらうき火をおね  
別の月もなまこあつた  
断そ花四九 宮よりいそげゆき  
まゆくみちのさきもむらう  
永き日わ今おをぬ自のちよ  
美の子草牛あふりし雨の中  
結つた靴はあつてさよはなく  
連さののさふらうらうらう  
流 盡りし葉神まやまきとん

越人 且葉 冬文 荷兮 野水 越人 野水 冬文 越人

山 登りしうら ねるまきけられ  
むらうらうらうらうらうら  
越二枚も ひろきうら  
おとりの雲のうらうらうら  
暮らうらうらうらうらうら  
風のちよきれの月舟の船入るよ  
きつ乃 僕のわらうらうら  
わらうらうらうらうらうら  
はらうらうら 一 野水のさき  
まきまのさきあふひひ 絶て  
降をゆらうらうらうら 代  
山つた所のうらうら ねる

且葉 冬文 越人 野水 荷兮 野水 且葉 越人 冬文



暑くもくもくも 無言の世の事 荷子

追か

三月十九日舟泉亭

越入

山はありあけの空の如く  
蝶ありのふかき 雲あり  
きんぎょも海はくまの空の如く  
行幸のしるしあり 古の  
物白き雲のしるし 飛渡のしるし  
月さき 雲あり 門をく 遊

春

雲ありありと 休る 味 空  
しるしありありと 雲あり 遊

元之 秋之坊 南南 其糟 梅露 谷ト 四 利重 重五 昌圭 雨相 舟泉

春



龍の舌あわのくくく梅向  
 舟く 虫 小 虫 小 虫 小 虫 の 舞 う けり  
 蝶の人 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫 虫  
 櫻 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 雲 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 け 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 竹 日 々 々 樹 乃 初 々 々 々 々 々 々 々  
 先 明 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 芥 稔 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 の 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

羽笠 且葉 杜國 犀夕 吞霞 聽雪 荷兮 今葉 且葉 越人 芭蕉

今 浮 乃 騰 乃 梅 蝶 々 々 々 々 々  
 山 々 花 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 花 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 春 野 吟  
 日 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 蘇 寺 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 櫻 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 銭 別  
 藤 乃 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 山 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々  
 故 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

重五 重五 越人 越人 杜國 李風 荷兮 越人 重五 今



かゝるもそのもりの尾にきり  
 何鳥をたけく焼てぬる秋は  
 うらとちおるの涼の二甲家  
 へまゝにたれぬのしほの  
 お行かふらんかゝるも  
 今成るもそのもりの尾に  
 武蔵の秋をたけぬ  
 きらけりやをいゆへは  
 遠坂のあつたき  
 うらとちおるの涼の二甲家  
 老圃曰知足之足常足  
 父くろく雑牧のしほ

九白  
 李風  
 越人  
 社園  
 龜飼  
 舟泉  
 内路  
 徳誓  
 越人

舞はの微塵の  
 さくまはたの  
 蒼蒼の  
 蓮花の  
 曉の  
 夏川の  
 譬喻品  
 と  
 五月の  
 秋  
 資質の  
 實家の

押雨  
 塵交  
 荷才  
 月圭  
 重五  
 越人  
 且葉











いふ其の根の末をさるるに  
ゆす人の紀念の末の故を  
あふ一宗徳の名を分り  
まほの身をそとを理ふもね  
冬うれをけてひるを  
あうくとさけく人の背  
身賊のあひさのあつら  
あつらさの 謎もさけ  
秋あ 一斗 りつとく  
日赤の末あ白う坊ふ  
中ふは種をさるる  
うの 謎もさるる

荷分  
芭蕉  
杜国  
荷分  
野水  
社目  
重五  
野水  
芭蕉  
重五  
荷分  
芭蕉

竹の 節々 葉の  
りうののてらけり  
けりさのまの  
後ひと 正徳  
あふさるる

杜小  
荷分  
野水  
社目  
重五

ねのりな杜末

そのあつら  
痛りまの  
あつら  
うらまの

芭蕉  
杜国  
荷分

芭蕉



庭月神不鞆鼓をかくもらん  
桃李をうさされ 貞徳の音  
るこのの 淡草の田原あうく  
奥のまぢくもよさよまぢく  
床あひて 泣きまじりてかき  
縁さなこけり 想しのまじり  
いもよと 痛恨ちまじり  
明日ハクもまふくかきまじり  
小三ちのまぢくもよさよまぢく  
月ハ遅りと 牡丹ぬき人  
魂のこころあうて 八つねのまぢく  
あれくよとけのまぢく

重五 正平 杜国 菫水 荷兮 妙の 重五 西蕉 杜田 重五 荷了

枕の思のわり 藤乃のあー  
ふらふら いづらの まきまき  
根のまぢくもよさよまぢく  
うくひも 死とまぢくもよさよ  
縁のまぢくもよさよまぢく  
三枝くもよさよまぢく  
乃まぢくもよさよまぢく  
祢まぢくもよさよまぢく  
やまぢくもよさよまぢく  
ひく河の今すけ 下まぢくもよ  
まぢくもよさよまぢく  
まぢくもよさよまぢく

杜国 荷了 西蕉 杜田 重五 荷了 妙の 重五 西蕉 杜田 重五 荷了







まうきとまはげのあふれ行  
併喰うる 魚 解きけり  
臨ふとれ 元治と作らむ  
ふ形 萱の 白六五  
うけしけふ 妙の 宇治を為と  
真置りたるの 福あこもむ  
あつたや 突刺の 花の さらか  
序をの まの をよみて 海の  
捨しよの 竹葉 長ふの 山つん  
眼目をさむく 刀 重うの 年  
雪なり ねの 雪の 團の 三つ  
継ぎよの 竹の 片を ときく

荷分 芭蕉 里五 杜国 芭蕉 野水 荷分 杜国 野水 重五 荷分

あつ人と 荷を 推よ 春を さん  
菰子の ひくと 小名を まるは 祥  
三日月の 東の 晴く 袴の 雲  
麻 湖の 水く 小 琴の 人 匠者  
高の 事 必 けり 一 々 重を 教る  
まうしよ きの 念 仏 教を 為さ けり  
くけり 重き 折 鏡けり 糸 起 鏡を  
あつと 飛と ぬり ち 花の けり 入  
その 予て ち 白を 手 承り ね あり

重五 杜国 芭蕉 野水 荷分 杜国 野水 重五 荷分

あつと 飛と ぬり ち 花の けり 入







戦の宮へ愛する女見せし  
 為純の葉をばはな 日代くら  
 たりみそて 花みよらる 正月よ  
 つらみ ちやうの 年暮りの宮  
 富の白け 目を旅路のまじりて  
 雲くくしき 南 高乃 城  
 のきくしき 花もあはれ人の集  
 居り ありのまゝ ちやうの 飛  
 鴻きくしき ちやうの ちやうの ちやうの  
 初夜の ちやうの 鏡ふまは 凡  
 北の ちやうの ちやうの ちやうの  
 ちやうの ちやうの ちやうの ちやうの

重五 荷子 杜国 野水 芭蕉 秋金 荷子 重五 野水 ちやうの 杜国

田家幽望

雲の白け 野の行く なみひわく 荷子  
 ちやうの ちやうの ちやうの ちやうの 芭蕉  
 櫻枝の家の 体を 木の葉の 時 重五  
 ひきよる ちやうの ちやうの ちやうの 杜国  
 音もあき 月見の 月のおちく 羽笠  
 破くる ちやうの ちやうの ちやうの 野水  
 初乃ちやう 蕨の 地連の ちやうの 芭蕉  
 樹をまて 富士 見ゆる 寺 荷子  
 寂しくして 枝乃 花の ちやうの 杜国  
 茶のく 糸將を ちやうの 凡れ 重五

芭蕉 荷子 重五 杜国 野水 羽笠 杜国 重五



新遊の鳥帽子の女又三十  
序一 是等 他一 一の是は  
たつふつき山橋のやうにえん  
麻くるといふ 荷の集あひ  
江を近く 荷をたせし世を捨て  
糸目出し 荷の いかちなる  
縁のふも 荷の 落たれと木松  
菫薬ゆり 荷の 木丸のふゆ  
荷をたせし 荷の 洞とらうら  
石言の 葉の けしふ 去れぬ  
泥の上の 葉を 引敷を捨てぬ  
中 荷の 木丸の ぬくま

野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五 荷分 野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五 杜国 荷分 野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五

丁ふての 草丸 山 荷の ぬくま  
草丸 や ままふふ 炭丸 つく 白  
芥子あまの 小 荷 交り 木 丸 丸  
むくまの 荷の ぬくま 荷の 実  
あひの 草丸 荷の ぬくま 月の 影  
高丸の 草丸 荷の ぬくま 荷の 実  
荷 拵の 草丸 荷の ぬくま 荷の 実  
豆腐 つくま 荷の ぬくま 荷の 実  
元政の 草丸 荷の ぬくま 荷の 実  
伏見 木丸 荷の ぬくま 荷の 実  
いろふよき 荷の ぬくま 荷の 実  
まけ 草丸 荷の ぬくま 荷の 実

野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五 荷分 野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五 杜国 荷分 野水 羽笠 荷分 芭蕉 重五



あすなをまふたをりつやうよ  
ふさぎのふりまのちうり

野水  
羽笠

追加

つるを見を新曲のまらうの森  
猪火のうらうらうのま  
とくまのたしつるのまをまきし  
核まの官をやうまのま  
銀の幣くくく月まの海  
ひらふの揚ままらに波岸の

羽笠  
荷分  
車五  
杜国  
芭蕉  
野水

あすな

あすなをまふたをりつやうよ  
ふさぎのふりまのちうり  
あすなをまふたをりつやうよ  
ふさぎのふりまのちうり  
あすなをまふたをりつやうよ  
ふさぎのふりまのちうり  
あすなをまふたをりつやうよ  
ふさぎのふりまのちうり







りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる  
りやうのさしほ一かゝる一かゝる

碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水

をまろじの園守。總て  
双六の目録のそくをまろじ  
飯の持任。むし。金傳  
中くふまろじ。居れ。金も  
家名。甲子。なまろじ。あけ  
将手。れて。い。ぬ。踏。の。軒。を。東  
月。あ。く。ふ。あ。け。こ。ま。ろ。じ。月  
あ。き。こ。ま。ろ。じ。あ。け。こ。ま。ろ。じ。月  
守。甲。子。な。ま。ろ。じ。甲。子。な。ま。ろ。じ  
一。費。乃。錢。む。ろ。じ。こ。ま。ろ。じ。な。ま。ろ。じ  
医。者。の。こ。ま。ろ。じ。な。ま。ろ。じ。な。ま。ろ。じ

碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水 碩水







うらふらふ世を道に居る世はよき世  
 まうい道 世を簡のさもまふ  
 ちうちやう 柱たふそくひらき  
 北斎ま 真白りーとの洞中  
 ういんうら 里入るまの月の影  
 まりりりみ のこま 裸びー  
 免のらーやまゆまこととまき  
 文珠の習教も 梨木持る 悪疾  
 なるまが 滅又まのひひか味  
 何とも せぬか 落る 泡 桐  
 志のふあ乃が 一うかうてのひひか  
 世山より 類を 見ぬか 一う

人 人 人 人 人 人 人 人 人 人

汗の香をさうくそをききりあし  
 志さうふ 西舟うちりけてふれ  
 花さうり 又百人の 様まき  
 まらけ 諸とも おひらき 旅

人 人 人 人

城下

鉄炮のまきまに 昂うお月うれ  
 砂の少まの 舞うくまらうく  
 西風よ まきま乃 小貝 拾つて  
 ちぬぬらう 一う 潮ひう 橋さう  
 甚いさうひ 二人 志ける 智何  
 秋のあき 物さうの ぶま

野 任 里 東 泥 士 乙 州 怒 誰 珍 碩



女席のたむ細けふむをそと移く  
目の中をのりく見をまらちなる  
今日もまき川原のまよふ愛  
親ありあつしきしきつりま  
るふ石神を履をうらやうて  
一里あぢういふま下新  
見あらしまふまほまほまほ  
そま世を洞つゆやまうんと  
雪舟ふふ敷の採女の宿まら  
まをまはさく丁面八段  
月を採るまをよめまあま  
黄深の 塔ありま早茂

華野里泥乙怒泥野里乙怒泥野里乙怒  
徑東士州誰士東徑東士州誰士東徑東士州誰

すまらまらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまらまら  
のま行居酒のま荒のま一  
古ままらまらまらまらまら  
時く八百姓まらまらまら  
彫所を見まらまらまら  
まらまらまらまらまらまら  
連も力もまらまらまら  
まら風のま置寺繩まら  
まらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまら  
まらまらまらまらまら

里東  
琢碩  
乙州  
野徑  
怒誰  
泥士  
野東  
乙州  
泥士  
怒誰



宿野の歌（ウタ）をききくはなま  
四十八老乃くろくろくき  
髪くせふ枕の跡をなま  
解を細目へしむけを  
杉村のたけはなま  
田の片端へしむけを

里東  
珍碩  
乙州  
野徑  
怒誰  
近士

雑

龜乃甲子あはれはつ八時  
時半はなま風かふく  
百姓乃木解去まへふの  
小舟をさゆりくろく

乙州  
珍碩  
里東  
探志

獨居くはなまのつひき  
機解をききゆり  
おれ我の御氣をちるき  
風呂の加減のちりき  
掌の空をきききき  
雪乃やうきりき  
初はり解乃美行  
かの子まよきき  
山原の香をききき  
つゆをきき起てき  
籾入の山をききき  
まよきききき

昌房  
正秀  
及有  
野徑  
二嘯  
乙州  
珍碩  
里東  
探志  
昌房  
正秀  
及有



某處に盛つるもの町の町名の今年来  
宵にせ共いふの毫乃ちちくはま  
うと早き目ととんぬるまおれ  
待いのあふふま乃ち出うねる  
深くうまは橋給のねまみま  
程らまままて守まのけの  
眠るふふま橋乃ちまのけ  
傳るままの 赤まのうの  
いまうふの 鉄一筋の 枝 着  
あ及びの 鐘 相 乃 け  
さくくと切籠の 風吹く  
な加の序ももかのうなる月

野徑 二嘯 乙州 珠碩 里東 探志 昌房 正秀 及肩 野徑 二嘯 乙州

喰物に味のつくとて味し  
膳拵るもの次ふ居 勢ぬ  
目をぬい食虎のうそふうゆは  
古ひのふくたに 室と 侍  
ままうふふの 杖ぬちて 橋まの  
徳を伝ふる 寺に 上 茨  
苑の頂 登の目ぬふまを  
さうらふふの ねふ 獅子のまを

珠碩 里東 探志 昌房 正秀 及肩 野徑 二嘯

○ 田野

夢乃ちや 苗代 時乃 角大所  
明まふまの心 輝嵐の顔

正秀 珠碩



け角ふとのりかきふゆりまのち  
くまふおろき 門口の文宗  
月影り利休のやぶを舞ひか  
家く、幸ふもいりま、かなり  
雲ハ雲つゝまくといふらん  
まらう、うづ 木後 昇りた  
此書文を百もあくるかあ、  
たのこくくけり 供乃侍  
腰子ハまき物系自由多き書は  
靴のあき 弓のうふ 巻く  
月あつ 師まのやの 銀治  
を御り、舞ふる 儀り、まき

全秀全 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀

いふぬこそ大根痛もちあられて  
獨あつ、ふも 籠籠ふ 替りる  
江戸酒まの江、まき、まき、  
あいの心弾 玉乃 入道  
雲雀雀 甲六 尻巻くまき  
火を吹くまき 神門の祖父  
木葉六 まき、まき、まき、  
家後後の 後 ちあう、まひぬ  
嵐と痛 人の海を 信ふまき  
茂くまき、まき、まき、  
最頃の 空よ、成るを 枝あき  
只と 果ぬ、りよ、まきの 何也

秀碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀 碩秀



るよふけの小菊とつる草袴  
花入初。招後の隈本  
我日路も管まで月をる波雲和  
寸布子ひらう歌中をうらう  
沢ゆー一兀あくと吃られて  
唯あうけくも猫六坪ふけ  
五規の小人町の雨あうり  
あふの楓木の身萌を  
枝はひり雪雪枕つるまあうり  
北野のうら場ふのゆらうら

柿食三吟

八州 柿の葉はまき柿食ふ

秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩

あふるきりのむ草袴のうらう  
けりうらう柿くまきうらう  
枝の月夜うらう抽うらう  
唯のよとんえうらう  
霜降く人の歌をえうらう  
枝冷うらの幾族あうらう  
雪のあうの波をうらう  
八州の屋の波あうらう  
ちのうらううらううらう  
雪うらううらううらう  
柿の葉あうらううらう

北 枝 州 童 枝 州 童 枝 州 童 枝 州 童 枝







懐 裳

晉其角序

郡藩乃仁柔のくや度又良かきうて此は家守て  
 起るる時め徳和の徳は身てしてとめを小徳の  
 入まへに思ふ思ふに徳をくく入て世をくく入  
 長く女をくく入て不徳の徳をくく入て徳の  
 心も及ぶに徳をくく入て徳をくく入て徳の  
 西行と女の骨とくく入て徳の徳をくく入て  
 徳をくく入て徳をくく入て徳をくく入て徳の







らうりて竹田の里やひまき  
ふまきくれ一里又光や山田寄  
新田より神懸輝く一里に  
のそりや神懸河あう直光院に  
まらまらり行や院卒の山に  
いろも新くもの山をたむ

大津  
山江  
昌唐  
本米  
百歳  
野水

たのふ期ふにたなまを亦の年  
神懸たそまもあらん述如  
神懸寺のまの山あや神懸月  
向あまの馬の町中は花よ十月  
あまもや神懸痛む人乃れ

其角  
全  
凡北  
嵐茶  
芭蕉

神懸けや神懸のくくへの冬よまを

凡北

たうりて

神懸麻のうまのうれり神懸く  
淡竹をたうりて園く一秋ふ  
たののたやわくくくくくくく  
この切の茶のたゆふ新ま  
古寺のいまもも青くかま  
い角の神懸く山田寄まを

其角  
越人  
猿  
凡北  
其角  
車来

神懸のうまのうれり神懸く

尚白



神途多々... 終 跡

霜月 附四

獲手... 民 西  
 あり月の... 七  
 今ハ世を... 且 兼  
 尾改め... 去 家  
 一 扱く... 無 九  
 ... 尚 白  
 ... 魚 為  
 ... 凡 北  
 ... 色 蒸  
 ... 其 角

... 凡 北  
 ... 及 境  
 ... 半 残

賞

... 文 州  
 ... 名 官  
 ... 去 来  
 ... 史 邦  
 ... 文 竹  
 ... 千 那  
 ... 九 北  
 ... 木 郎



多の徳を因してなりぬの心野  
鳥のけりも森入てりるる金草の  
びきりて標成らるる 標ののり  
徳寒ふ前引入てりるの  
まの味やや標のまの味は  
くちありの蒲 標のまの味は  
見やうこそ 標のまの味は  
公徳行のいひのまの味は  
首のいしてりるのまの味は  
題のいしてりるのまの味は

文 州  
終 通  
三 葉  
松 風  
真 角  
心 年  
智 月  
竹 戸  
曾 良  
標 丸

あつたをねねも思ひの個代  
は白砂小峰  
睡つてふりしるるのまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は  
標ののまの味は

文 州  
史 邦  
承 年  
元 非  
画 好  
其 用  
火 邦  
初 心  
探 丸  
元 非



かろくと川一海や ちかむら

△

信濃の海をこらふ

ちかむらや 枝の木の葉のたけ

芭蕉

草葺の扇をたたく

善光の心算もふりぞき 葎の香

其角

あけ目へ竹のふらふらとけり

羽笠

はくとも健あふり ちかの 旅

那七

あつりけて行やも ちかむら

去来

青瓦の海

乳のこよふ世故に ちかむら

尚白

ちかむらと ちかの葉のすのけ

芭蕉

鉢とくに ちかむら

乙洲

一日の ちかむら

文州

住吉奉納

ちかむら ちかの葉のすのけ

其角

ちかむら ちかの葉のすのけ

須珠

ちかむら ちかの葉のすのけ

祐甫

乙洲の ちかむら

ちかむら ちかの葉のすのけ

芭蕉

ちかむら ちかの葉のすのけ

其角

ちかむら ちかの葉のすのけ

長和

ちかむら ちかの葉のすのけ

去来

ちかむら ちかの葉のすのけ

公

ちかむら ちかの葉のすのけ

羽紅







累りくもぬいそむお母乃姿の如 金奉

別僧

ちんちんまのをやまきりてりて 越人

おまのいりしりりりりりりりり 珍碩

い命いまけりの一まや便りて 杜園

青くもたもひもけりけりのお 崖前

井のすゑりし深く清くは若 半残

起てておたしきわねおのりりり 仙舟

起くくのむこうすうきつらりり 仙舟

題すまゝしつてん落梅書二首

夏後し知るはあをむもなま 仙舟

破垣やうきと麻のよの通ひぬ 曾良

南の猿店

清のそくなくれぬる 国の桐 千那

沈滞やまぬよのいあふ柿の花 薄芝

豊國みく

竹はよの力を清くぬふふへき 九兆

あけの子や富騰の如く 去来

おけのつみや持き回れ 繪のすまひ 芭蕉

花も吹くまきりしりりりりりり 正秀

明石夜泊

梢壺やまろがのささきをさる月 芭蕉

云う代やと境座のあやも 越人



又三日のちぬきしる

あぬ昔と云くあらる菅蒲其角

糝結よりいかにまじり芭蕉

環藤の度早よりい降岩翁

さひいふいふ入るいふまのい尚白

ふり、六日大坂赤地のまじり輝今

大坂や見ぬよの夏乃輝今

ふ草や兵士の山老の芭蕉

遠くいふいふ下は全

此境まじりいふいふいふいふ

さばいふいふいふいふいふ

ふりいふいふいふいふいふ九兆

ひねまじりいふいふいふいふ水節

ふ士の潤をいふいふいふいふ史邦

奥州各々の那ふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ芭蕉

大和紀伊のいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ

いふいふいふいふいふいふいふ



ついでにまたその時やまゝの雨

去來

繁利や一夜ふ余情ての月も

凡兆

日の曇らば花も傾くさしつゝあぢ

芭蕉

雑物やとちとせよふくみし雨

羽紅

七十余の老翁のあまのうけのふゆか

あはれうてたのいふてくれしものさびし

その老翁のまをうへ一時のさみしさを

人におぼやさうけしとまをいふもさびし

古事よまたるのまをいふもさびし

おさうけし

其角

六尺も力落しや八月あは

去來

あついでに茶山一山の夫婦を

正秀

げし合子とものさしやまの島

游力

孫をたて

まの東の一家にやうん雨隠

智月

妻おほて舞もて参り出雲

花紅

あついでに

風流のこゝめや夏の田植舟

芭蕉

出羽のまをよめ

全

石舟を面影うて如影の足

法隆寺阿妹を佛の太子を深

清浄のまをよめうへ紅花の足

千邦

田の取けりていふさし

万平















世風やとてはきつていふまで

蓮の子の親のふりかへすはあ

へ頭あつたはきつてきつたのふせ

ついでに

そのまへに指の毛の皮ひか

はなはたかきつてきつたふせ

ついでに

若くはあつたふせきつたふせ

岸の上へつたふせきつたふせ

えは二年のあつたふせきつたふせ

うう二歳あつたふせきつたふせ

あつたふせきつたふせきつたふせ

名乗りのいふ

のりくめきつたふせきつたふせ

相あはれつたふせきつたふせ

百言あつたふせきつたふせ

切戻すつたふせきつたふせ

名乗りのいふ

痛存のあつたふせきつたふせ

海士のあつたふせきつたふせ

かたのあつたふせきつたふせ

あつたふせきつたふせきつたふせ

あつたふせきつたふせきつたふせ

あつたふせきつたふせきつたふせ

子尹

羽紅

九兆

去来

李由

曾良

芭蕉

九兆

落梧

芭蕉



むしり入る甲はわりのまろくは  
草野やまのたのしみは  
たのしみは  
芭蕉  
尚  
風

葉月や  
二と月を  
意想と  
月見せ  
去来  
半  
去  
来

月見せ人ば見入城の将郎  
去来  
半  
去  
来

松りらふ  
土  
芳

月影が指す  
火  
丹

秋の  
阜  
袋

秋の  
乙  
筋

秋の  
九  
北

秋の  
尚  
白

秋の  
曾  
良

秋の  
芭  
蕉

秋の  
仲  
村







肌きし竹切ふのうけひまふ 九兆

神田素

さねはくしとひまふ梅あはるる

林田素の歌うのま

梅あはるる梅あはるる

花さくさく大宮元とまうりや 嵐野

行れりやの目弱しとまうりや 文典

まわしれりやの川あふ 九兆

世の中ハ常時のはのひまふ 全

梅あはるる梅あはるる 荷守

春

梅あはるる人の思ふ梅あはるる

上梅のさきまうりやのうけひまふ

梅く香やと路備入る人の身は 去來

むえりやあやまへる身は角 句空

庭奥

梅く香やと利き法は宮の奥 土芳

と門は梅や宵あきさるる梅の花 半残

梅く香や酒のうけひのうけひ 蝉集

むえりやあやまへる身は角 其角

ゆきまふのうけひのうけひ 芭蕉

瘦きやゆきまふのうけひ 千那

灰捨て白梅さるる 九兆

春



月當りの夜受あつや 厩年夜

晴香は動月黄香

入相乃梅り なるあひひる

武はあひひる 藤草の結

藤くさき 雲の細月や 園の梅

辛木のこし 雲の細月や 園の梅

山より月をそと 雲の細月や 園の梅

けしき 雲の細月や 園の梅

あひを安んずる者といふ 雲の細月や 園の梅

ふけり 雲の細月や 園の梅

感物 雲の細月や 園の梅

あひを安んずる者といふ 雲の細月や 園の梅

ふけり 雲の細月や 園の梅

感物 雲の細月や 園の梅

あひを安んずる者といふ 雲の細月や 園の梅

ふけり 雲の細月や 園の梅

感物 雲の細月や 園の梅

あひを安んずる者といふ 雲の細月や 園の梅

ふけり 雲の細月や 園の梅

感物 雲の細月や 園の梅

あひを安んずる者といふ 雲の細月や 園の梅

ふけり 雲の細月や 園の梅

感物 雲の細月や 園の梅

選

風

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙

乙



















母の物くつづくてその様をくらね  
 佐けるよしの墓に花をさきくはれり  
 まいかも花はゆふにさきくはれり  
 初より手とりはくはくはれり  
 あつ傍の燈はくはれり  
 花の影はくはれり  
 角ももまはれり  
 腰きもれはれり  
 大峯やよりの花の果  
 乃清少のやう  
 乃清少のやう

園風  
去来  
元北

半残  
長眉

曾良

嵐紫

樹平の花をくらね  
 庚午の寅家を焼て  
 花の影はくはれり  
 花の影はくはれり  
 花の影はくはれり  
 大和行舟の如  
 草花の影はくはれり  
 山鳥や脚の影はくはれり  
 やまの影はくはれり  
 花の影はくはれり  
 花の影はくはれり  
 花の影はくはれり

羽紅

加州  
北枝  
元北  
尊松

芒蕉  
探丸  
智月  
山川  
式之



はる家

まのちんくわん初瀬の音をた

乙及  
曾良

とて水精

の書をこそひの人のしける

芭蕉

去來

おきの羽も羽な かたがは ところへ

芭蕉

一ふき風乃 木の葉もあつまる

元北

たぬきをあつむに 藤はたつら

史邦

まのいふおき 道なるまの月

蕉

人知れぬに 名物の 利は

來

おきのいふおき 藤はたつら

邦

たぬきをあつむに 藤はたつら

北

何れも おきの 内は ちつら

蕉

里見をえ 初々 年の 見おく

蕉

むつら 藤はたつら 藤はたつら

北

笑 藤はたつら 藤はたつら

邦

吸りのいふおき 藤はたつら

蕉

三里 藤はたつら 藤はたつら

來

おきのまの 藤はたつら 藤はたつら

邦

さーまの 藤はたつら 藤はたつら

蕉

苦きまの 藤はたつら 藤はたつら

蕉

ひつら 藤はたつら 藤はたつら

來



らうくまひり二田のあひまをて  
るのけいさききつり山のか  
火くりにあきんいさるまの  
かきあは皆時には年ころ  
瘦骨のまゝ起る力なき  
勝をころそ車りあむ  
ふきんあね殻たうらうらえ  
いまやうまきの刀さし  
せりけい掃てはまうまわ  
おのひ切るみくさひ見え  
青天小角明月のねらけ  
あめのむすはるあ初を編

蕉 来 邦 北 来 蕉 北 邦 蕉 来 邦 北

葉のうやまきあなまのあひま  
わのこまきあふ風乃々々  
神合々やあては又さうり  
うらのあまけきこあき  
一様新つくる空乃そあ  
あねまきまあまあはあまのあ

邦 北 来 蕉 北 邦

市中人あはあひあ夏の月  
あひりくとくくのおま  
二番草あつあまああ  
灰うちうくくくあ  
あああああああああ

凡 祖  
芭 蕉  
去 来  
蕉 北







いのち 晴しき 櫻を  
さかしく 花の 入る  
浮世乃 男ら 昔  
ちの 女を 遊ばし  
四角の 心は かくれ 母  
まの 心は 風を 追ひ  
うきうき ありぬ 登

戻け 桶乃 末や  
わが うちを せり  
新平 一まが じ  
かぶて 膝 十乃

ふけ 経入 きの せ 橋  
幸の まま ふう ち  
まの 心 せ け  
摩耶 うちを 振り  
ゆめ あり あり あり  
怪の 心 あり あり  
めのお あり あり  
遠世 あり あり  
金持 あり あり  
あり あり あり  
町内 の あり あり  
何を あり あり







あつたまはつてふきれおけり  
住隅ややま嵐くもそぎる月  
二階かろあつらうまもるなま  
放やううらの跡へ見えては  
物の美あ延のうららたき風  
ありーんのそくめはゆる裕康ふ  
内を流るる海を多くこき  
如の如のそくめはゆる裕康ふ  
すくまらるるあつらうまもるなま  
おれたれよまきのれおまもるなま  
まらうまもるなま  
晴やうまもるなま

素男  
居  
蕉  
東  
碩  
葉  
磯  
馬  
智  
凡  
北

はさくまはね外を海らうら  
後の極やうまもるなま  
原まらうまもるなま  
まらうまもるなま  
店名物くまもるなま  
行わくまもるなま  
ころまもるなま  
六條やうまもるなま  
身はねれあつたのなま  
小りの路又なる細工もも  
湖よふくまもるなま  
あつたまはつてふきれおけり

去來  
北  
正  
来  
半  
残  
土  
芳  
残  
芳  
残  
風  
猿



















坊小の首をさう

推乃まきまう入て味を蝶の髪  
目行のやよははふやふはゆ

集

朴水  
市隠

文とさあま

膳所まやや半苗のうみまは依

半残

まら形とまは依

袋くれやま相田のまらま

之造

書音

一復入ふふさくくや筋ねすま

集

魯四  
及肩

夕まや杵木の自奥の一あまり

昇猿腰掛

社凡や田上山乃くやまら

尚白

時義

あふまをもまこのわらあはれ  
木辰ぬく侍ふまけり勢多の化

北枝  
木熊

包時にかき

集

病

逢のまきと葉舞やまぬのし  
指む花たまふと成佛ちまきふ

智月

石山や行くて果せり秋の風

羽紅

桶の輪やまきれて鳴やまきんは

昌房

甲ふふ今うまめり時のはらまか

何所

啼やいしくはかこりのとまうと

越人

おんまゆりうつる

蓮の葉のまきもか飛入と庵る

筆哉



羽年益まゝの四書

春西やあけも雨のそよ

嵐紫

月夏

涼きや此春まゝは終

曾良

續 穠 義

八九日 中二西障の 却うぬ

芭蕉

春はたぐまの 畠の秋輝

沼園

初冬もくさるもあまの 雲を

馬寛

由はとくし 暁のあけをい

里園

きのふかき 白おろるる 月のま

沼

物象月うまそ 肌雪うかた

蕉

鏡橋もあけく 八風ふゆわ

里

孫の跡も 祖父の 借紗

寛

桜橋よ 留てりくる 藤刀

蕉

鴨を 志す人ハ 生半 膝乃 終

法







花のたや葉のぬまはくくを  
ぬくくうのわらうけらふのみ  
里 菟

雀乃字や掃ふてはくもた殺  
つたの岸おありらるる月  
まの家を穿てたのまハ柱暮そ  
あつくたる紙のそく甘ほ  
霜ふらるは茶釜ふる供ふた  
越とまのそ外の 洗 且  
悔とらけふの 一歩のたきを  
待状まんでたまふ ありけら  
里 菟 里 菟 里 菟 里 菟  
里 菟 里 菟 里 菟 里 菟

よとたけくはまあかの天をまきり  
あまう まいなる ぬくさ けり 雀  
はらのまをくくしてあてた 約 逆  
風ふらるる 早霧のゆら月  
雲新秋の夜居る ぼくく  
空風のむきく 如く 女 けり  
明とらる 何勢のまゆの年終り  
葉ハまきく ころぬ 一徳  
信軍もあかりて まきまは 感  
まき 輝 あり けり 里 菟  
雲のたけハ 雲を 掃 残  
まのぬ 念 ありて 掃 ありて 存  
里 菟 里 菟 里 菟 里 菟  
里 菟 里 菟 里 菟 里 菟







智恩院の誓りの誓を掲げて  
せうくくらの後ハ 楓さくやく  
廻の鮫みあをさけけたる  
目利で家ハよの昔さき  
状ハおを澄公の長御作らる  
まことさきまをさぬ 目乃親  
草の葉あふくくらの丸の院ちか  
仔細もあつふ 練くらの西  
うまき 藤ハ野くへさ言はるる  
宵明 さよふ 明さるる せう  
は本心のかたの仲よりけらと出で  
柳乃清く 門を かくはけら

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟

百世ふかきりて世ももさきま  
あまのうきを待たあふる 行ハ本  
後物の澄法くまをくくく  
けふのむのまふ 昔くらのさき  
おと遠ふ 藤の中の俗縁のま  
別をくく けふ 生むハ 後  
火燧方 火けけて 藤のま  
一石さき 一 確の さま  
ねくく 突天目の起る天を  
仰ふか 威のちくく ねさき  
月りけふあき 一まことあき  
かのひのまふ 早終て 根さく

里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟 里 沾 菟



ふ耕ふ娘をよびて娘のまじ  
ま官家のえまをよびて仕ま  
花のつとと遊女のやうなま  
ちのひげいなる山後のま  
まよりのまをよびて池の  
一両ふりてわらうま風

里流荒宅荒

法園

猿葉まよりのねるまの松葉  
月八をよびまを輝まらるま  
水うら池の中うらなうら  
條竹まよりのまをよびま

芭蕉  
支考  
惟然

勢うあつとやうて暮れ月  
通りのまをよびまを輝まらるま  
まをよびまをよびてまをよびま  
まをよびまをよびてまをよびま  
中うらうの状のまをよびま  
羽目りのまをよびまをよびま  
一まをよびまをよびてまをよびま  
まをよびまをよびてまをよびま  
かまをよびまをよびてまをよびま  
初あつとまをよびまをよびま  
まをよびまをよびてまをよびま

然考甚然考甚然考甚然考甚



乃て通る紀三井ハ花の咲く  
若のちのころみいひくおまじ日  
あち風け又西のちり北のちり  
ころしおまじを大のちか  
後海の内まハそは波をま  
堂のまじまじとせし  
大せのまじり二日ハ  
まじりまじり一  
来り極のまじり清  
奥のまじり  
酒よりまじりのまじり  
まじりまじり  
然 考 甚 然 考 甚 然 考 甚 然 考 甚

庭のまじりまじりまじり  
まじりまじりまじり  
大工はまじり  
まじりまじり  
かまじり  
此らまじり  
鴨のまじり  
考 然 甚 考 然 甚 考 然 甚 考 然 甚

今宵賦

野盤子 支考

今宵の六月十六日  
乱のちのちり















言出まゝある酒心とあてひて文を

凡言も酔のまゝに述ぶるは

酒飲ふと返すのまゝ甘く蜜の如

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

くつゝと酔をうけけりまゝに

田家

菊菊乃々名物とまゝに

咲くも名にや 飯米又寸石

山門くつゝと酔をうけけりまゝに

なす木木の根やわづらひ

花はまき子とまゝに似合ふ人の流

なつかやうふまゝに床をひたす

ぬりまゝに酔のまゝにや

一回はたたみのひてや 只此等

ハまき子とまゝに似合ふ人の流

若菜

鶯様やひまあわくおあわ

惟然

支考

沾德

猿雖

湯和

山州

木節

子珊

卓袋

李里

桃首

一桐

如雪

其角

一鷺

卓袋

沾圃

山

嵐雪



急の啼やむ 遊の若菜ハ  
夕伎の船より 空のつらさをか  
一うふ乃牡丹ハ 空をさるる葉ハ

梅附柳

春もやゝ 瓦をくくのふ月と梅  
米さよきや 大玉梅のしら乃花  
守梅のふよの葉あり 時を空  
里坊より 確まうとや 心免のつら  
投入るや 梅のわが片 露のたう  
疵のの 産とれ 梅のさうらふ  
あゝいゝも 空をさるる葉ハ 梅は  
梅の中や 梅の影をさるる葉ハ

あゝ梅や 一くらの空をさるる葉ハ

の梅の所や 梅の影のさるる葉ハ

天神のやゝふ清也

貝子のつけと 梅の影のさるる葉ハ  
梅の影のさるる葉ハ 梅柳  
時々いふふり 川をさるる葉ハ  
ちろえを 散へちろえや 古柳  
まの梅の影 ちろえのさるる葉ハ  
輪をうけて ちろえのさるる葉ハ

梅附魚

梅の影のさるる葉ハ  
梅の影のさるる葉ハ  
梅の影のさるる葉ハ

曲梨  
孤屋  
尾取

芭蕉  
此角  
其角  
昌房  
良品  
芳  
力平  
魚日

千川  
大洲

遊系  
千那  
意元  
李由  
九首  
巴丈

其角  
史邦



雲のふもよりの体はあつし  
うんひのや柳のうらな敷のま  
所、盡もひのいと説のあつし  
春の雨や筆のつゝま入雄のあ  
物も、お目入まわをのま言根  
あぬまの言ふ似合ま言白  
蔭や田のたつうのうらひい  
泉の中や舟を御してあや  
水の中のや舟のまのまの  
蠅うちふたうくか首のま何  
行鴨やま風ふつれるの磯  
北芳野のあつし

智月 芭蕉 去味 細堂 今下 長虹 北峰 枇杷 河瓢 為常

朝のう子のひまは 磯のま  
つけろふとせふあつし ばく山 鯉の  
あつし魚は 一こまうや けつる  
白魚のまのまのまのまのまの  
川にふのまのまのまのまのまの  
あつし魚をまのまのまのまのまの

土芳 圃水 子冊 山蜂 其角

まき草

なつててお花のまのまのまのまのまの  
まのまのまのまのまのまのまのまの  
春の舟や舟のまのまのまのまのまの  
川にふのまのまのまのまのまのまの  
骨の両あつしやまのまのまのまのまの

正秀 此節 羽紅 穢錐 闇楮



味ひやさくらの花よふらふとき  
淡きうら味そふりのも思ひにさ  
提下りあらの花ねたまにれ外  
端まきく土曜の切目やさき  
あまもふまにふらふく太文根  
早蕨やひまうらふら ねらう  
みそお屋のあまのしり 雲  
日乃新ふ梅乃花をま楊花等ハ  
花のうら英やさきうらまにねらう

猫蚤月樹蜂

赤お花月よかなん 梅乃花  
うらまにうらまにうらまに梅乃花  
あまのうらまにうらまに梅乃花

白日志つとく

さまうてふ翅ハ初くは味  
は原里まらなるかや雲き雲のね  
鱈乃く年あつら梅ふくくねら  
風吹子 雲のあやなる山崎ハ  
登雲乃てはにせうさか梅乃

春鹿

根おくくかや廣野の、麻の角

春耕

妙福乃あつらあやあさくく麻  
苗れやまを越えま支のき月月秋

車来

荒雀

馬草

拙候

乃龍

正秀

夕可

一桐

圃落

檜九

支考

口白

柳梅

惟然

園指

雪空

出

沢難

木管

此節



平川の田を久にあり籬使入 一鶯

桃 附橋

白桃や志のくもあまきあはき定 桃隣

全世世ははらこ盛なり 桃うらた 今花

伏見うらた未花の 上乃花の花 雪芝

梅さるうらた 梅さるうらた 水鷗

花さるうらた 桃や奇あはの 其角

江東の春田の 懐の懐の なるあはの

小振舞ふ光をやくせ玉つるき 角上

穂の穂をよまよは 穂の穂の 残香

ちり花のちり花のちり花のちり花の 洞木

ちり花のちり花のちり花のちり花の 野取

歎冬 内御膳後

山吹や垣に干する 葉一重 周指

山吹や垣に干する 葉一重 西堂

山吹や垣に干する 葉一重 雪芝

山吹や垣に干する 葉一重 荆口

山吹や垣に干する 葉一重 荆口

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月

山吹や垣に干する 葉一重 春月



まの雨や唐かあつる甘きころ 遊刀

なまの雨や武江の旅館を尋ねりて

春雨や花ころおつくくくは本 支考

たる雨や光りくくくは旅路を 桃

淡く雪や雨の進々たるの空 凡

仍つてや狂ふ居る石は直 凡

は干

乃わり帆の吹送るまぬ故衣 主

高全の歌をきこひ干か 園

蕨春

おうらぐやあられ降るまを夜 許

まの雨やまの雨に越ゆる柳の音 六

はまの雨やまの雨に越ゆる柳の音 土

くけろくや出敷は腰の柳あつる 力

小笠原に大あまはれとくわね波路を 万

知れぬは宿はや世も若雨の井 苔

木の兵才くろ骨うくわねけ糸 均

まの雨やまの雨の木の甲は小空を 正

三尺の鐘をのりて見よのまの此 仙

引よの甲申ふ交るるや田螺を 浪

三月尽

猶おもむく酒ののち残るま 支

紫貝

着るのやふふく門くまの海歌 武

心年

仙



蓮乃ハ年乃クモラノミシ  
尚白  
圃若  
山鋒

母方の紋もくしや末も

遠某のらふつひく

元日やおあつまの夜のくま表  
千川

くもたぬまやけはれうらの孫  
芭蕉

櫻の世にはまうのやまこは  
其角

糸織のたふひひひて本々信  
去来

常々小橋月と千の羽ふまうの  
土芳

今春様とすゆけ  
内扇

え日やまうのぼるうのま毎のこに  
猿雖

子かたのまの勢原やまのま  
鳥梁

背くおふおを月をせと名たのま  
世童

上流のまの目下を尾の細のま  
耕雪

鞍のまの寄とをいとく初月  
左柳

たのまや年ハまの横のうは丘石  
前川

枇杷乃もまの横随うの初月  
斜嶺

世のまや野ハいれもまの夷  
山登

濡ららや大うけの初月  
任行

え日やまをころかなを鶴のふ益  
竹戸



糸やこころの川に鏡もさるる  
梅葉や鏡もやとくまきさのあや  
雪りし其その日は似たり雪ひき  
梅物や目をさしあうくまきさ  
ゆきりやあやゆり物入るる  
志のさきや梅の月のまのま  
梅月 羽くく 房もあやま  
改のあやま 春梅もむ 房  
湯あやま 入るるやののくまき  
けけがらやら 梅のくまき  
あやま 入るる 梅のくまき

兼光の梅の便所の歌

且葉  
右圍  
圃角  
北枝  
春風  
漢川  
貞喜  
春幾  
蕉下  
楚常  
挑葉

日すれぬや 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉  
梅の葉 梅の葉 梅の葉  
七くくく 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉  
あはくくく 梅の葉 梅の葉

牧田  
李東  
須之  
和乎  
何處  
牧童  
不的  
和之  
女  
知月  
其角  
兩邑







物や 日ふさくつらるるまはまき  
思くうり 女さくらのぬまはまき

園松  
物萩

園中二百

ひ仲乃 古もふらりき 村の花  
年切のきまも 村乃さきま  
姫百合や 上よりさきま 藤の春

片筋  
千川  
まね

題山家く百合

あゝ雨やうきうねをば 百合花  
山も原のうきうねや 村の春  
冷けくひ入さきま 村の春

支考  
尾乃  
沾圃

白のうきうね 藤の春  
白のうきうね 藤の春

支考  
尾乃  
沾圃

たき飯庵のうき

登るふや 日入るふらりき 花盛  
夕影や 輝てくまをば 花盛  
いよ白や 輝てくまをば 花盛  
藤乃 花をば 藤の春  
蘭乃 花をば 藤の春  
蓮の葉や 花をば 藤の春  
春あつて 花をば 藤の春

沾圃  
芭蕉  
炭紫  
残香  
小節  
白雪  
良品

瓜

形露ふよき 藤の春 瓜の出  
花あつて 花をば 藤の春  
瓜

芭蕉  
玉暁



糸桐ふる様ハ雪ふれた杜若

凡弦

早苗

京入やまの田の田植の降平

灯七

早乙女は信じておぼんはまの細

園枯

ふく身の極かくまゐる早苗

魚目

田植の方やあふれぬ泥はか

きり

一田のくけやうくや水のま

北枝

甲の兵ふる謙梅ふるまふうね

支考

堂

数多火の烟ふもくやうん

片六

二月月よ草乃乃愛ハ明より

母萩

納涼

海さや竹梅のり

羊残

きかきかや度さあむふ久涼

惟然

涼川の度さあむふ

史邦

たきかきかや見あまうも兵の涼

き聖

涼さややうんをさ出の縄はみち

杜年

石さやや書門あけやうんさみ

百年

涼さやや牛乃尾梅く川の伸

万年

漫真三句

藤うけや中よ涼は塔あふの

洒堂

涼さやや梅さうのさあふさあ

支考

牛の涼を梅さうのさあふさあ

支考

たきかきかや見あまうも兵の涼

史邦



遠くをゆく人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん

藤原

あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん

藤原 野我 万平 正秀 甲周 我眉 王芳 正秀 去来 全 藤

あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん

あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん  
あはれなる人ぞあはれなるらん

又月雨晴なき



あしきもや青くもみん傲の年  
さみしきもや青くもみん傲の年  
八月西の晴よくれぬ強つて  
夕まきやきし一合けり日入す  
白西の蓮の葉やこころのあはれ  
夕まきやきし一合けり日入す  
あまきふ事やいそぎやま一西

不王 芭蕉 店圃 拙候 苔藓 曉鳥 圃水

蟬

白西の仲夏ついで蟬の如き  
まらへしはく事そまけり蟬の如き  
森の障子まはれやけり蟬の如き  
あまきふ事やいそぎやま一西  
あまきふ事やいそぎやま一西

正秀 形放 乙州 虎鳥 桑谷

雑夏

蒼空のくもりの初や心用りぬ  
あまきふ事やいそぎやま一西  
あまきふ事やいそぎやま一西

松仄 荊口 如真

川持ふ出で

あまきふ事やいそぎやま一西  
あまきふ事やいそぎやま一西  
あまきふ事やいそぎやま一西

文鳥 葛正 水鷗

あまきふ事やいそぎやま一西

馬見











二見をりて多産地と云ふ月  
 支子荷と物とては人自は  
 梓の名の海に於て月を  
 山々の毛のしほは海の家を  
 名月や甲の毛のしほは  
 場と存て月かたうや建機  
 明くも海かたうや建機  
 明月やいもひるるる  
 飛入乃密りて海と人自は  
 渡川のつらうは海と人自は  
 飛川のつらうは海と人自は  
 積骨乃月と云ふや定る術  
 景桃

家小こ若女と云ふは父の  
 秘してはくはくをいひて  
 姨捨と云ふのはやみ月の月  
 妻のまきと月入るは海と云ふ  
 昔ころの月と云ふは海と云ふ  
 月と云ふは海と云ふは海と云ふ  
 海川のまきと云ふは海と云ふ  
 川と云ふは海と云ふは海と云ふ  
 十と云ふは海と云ふは海と云ふ  
 七と云ふは海と云ふは海と云ふ  
 更らやまの海と云ふは海と云ふ  
 唯然

支考  
 空牙  
 如真  
 宗比  
 木枝  
 利合  
 丹楓  
 野萩  
 正秀  
 文章  
 景桃

沽圃  
 馬菟  
 里東  
 牧童  
 芭蕉  
 全  
 猿雖  
 唯然







お食

おのちやん 蒼々としてやん 赤  
あさくさう 遠くへさうさう 柳の  
あまのさう 池原のふりて湯舟の  
おのちよ ちよん 赤の舞物よ

虫雨や

まら しの 情は けいひの  
雷もや 乾く ぬれ ぬれ  
火の 情を 明く まる 中兵衛  
わが おもや まる 斬と まる くに  
この 中を 形と 惚合 月の 乾  
鉄 鉄や ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

田上尾  
園坊  
風愛  
其角

可南  
北枝  
正秀  
小島  
杜若  
振任

鑑 鑑乃 極を ひきまら 乃乃と  
草の 實より 乾く ぬれ ぬれ  
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
乃乃 ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
鶯 鶯や ころも ぬれ ぬれ ぬれ  
西 西の 極より ぬれ ぬれ ぬれ  
老の 名乃 ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

秋風

秋の 風や 二葉の ぬれ ぬれ  
草の 實より 乾く ぬれ ぬれ  
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ  
ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ ぬれ

草若  
永峯  
文草  
三葉  
氷固  
支考  
芭蕉

遊力  
式之  
支考  
風圃



まろげんじの草花あの人を世が  
あんとるやあつとむふとら要  
のましくてもう海舟の世が

猪妻

草

ひらうちの守物にし猪の  
無事あつとむふとら海の上  
月々のや後つと民のあつと  
いひつとや国のあつと

水賣内前

因雲のあつとむふとら  
炭焼の世があつとむふとら  
秋空や月あつとむふとら

はあつとむふとら  
まの草花あつとむふとら

何やの山中ふら甲の

あつとむふとら  
まの草花あつとむふとら

後手のあつとむふとら

あつとむふとら  
あつとむふとら

田舎業

園燕

九古

猿

一東

宗比

土芳

芭蕉

為有

香虎

証堂

可爰

沾圃

怪然

芭蕉

小鯉

風雅

一政



起一せーくはぼくく 其のまの  
 本のしんが物おあつ入るの直ま  
 さあつらつらるるまのま 時正  
 ぶのまのまのまのまのまのま  
 昔まのまのまのまのまのま  
 甲橋川く 宿守くや 小百舟  
 山まのまのまのまのまのま  
 長くまのまのまのまのまのま  
 一まのまのまのまのまのま  
 恥まのまのまのまのまのま  
 百まのまのまのまのまのま  
 本評のまのまのまのまのま

そのまのまのまのまのまのま  
 沽圖

公のまのまのまのまのまのま  
 ありまのまのまのまのまのま  
 着まのまのまのまのまのま  
 口まのまのまのまのまのま  
 びまのまのまのまのまのま  
 傍くまのまのまのまのまのま  
 暮 秋  
 まのまのまのまのまのまのま  
 仍れまのまのまのまのまのま  
 乙州

車庸 買止 如雪 芭蕉 乃就 半從 支考 全 惟茲 木節  
 萬葉 獨一 支考 元峯 犬草 時あ 乙州



行杖や、身取ひらけ、る事のもの

雜秋

又六十海を待たせりて殺し

粟くしの山家信也、事、事、中

あふ、海、の、待、た、せ、り、て、殺、し

殺し、殺し、言、ひ、す、杖、の、所

身、取、ひ、ら、け、る、事、の、物

文、の、夜、の、橋、の、下、の、影、の、影

舟、の、影、の、影、の、影、の、影

舟、の、影、の、影、の、影、の、影

舟、の、影、の、影、の、影、の、影

芭蕉

之道

圃友

畦止

口友

菘子

ノ平

宗波

橋は月や願はとあるら月の様

とを治

冬一歌

晴雨時

ま乃じのほのほのほのほのほ

あくまのほのほのほのほのほ

けふとあり人も年よれ 初分ぬ

一あくれまきとあきと 目影る

冊披

小枝

芭蕉

喜佑

冬







牡丹の香も起りてくるさうな香  
菊の香も果ててまじりて寂の香  
はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香  
はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香  
菊の香も果ててまじりて寂の香

其角  
桃隣  
沾圃  
芳言  
了見

はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香  
菊の香も果ててまじりて寂の香  
はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香  
菊の香も果ててまじりて寂の香  
はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香

又の香も起りてくるさうな香  
菊の香も果ててまじりて寂の香  
はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香  
はるの香も雨やいらぬまじりて寂の香  
菊の香も果ててまじりて寂の香

ま堂

あふや 結露もくわー 日れ遠る  
おを清く寝やまゝのあふや  
多仙り 花はみ 花はみ  
花はみ 花はみ 花はみ  
花はみ 花はみ 花はみ  
花はみ 花はみ 花はみ

曲変  
水因  
昨然  
とを  
車庸



久しきものいふらふらふやきり草  
山も葉たれも花捨てやうきの散つた  
露 土 芳

十の葉 花を枯用

かひいふ 十の葉ちる 花も草の散  
葉さえてはの軒然し花も散  
冬川やあつ葉の散りて花の  
葉もくはらひつらよまの葉

本町坊宗のいふをいふなて

たのいふういふいふいふいふいふ  
葉もくはらひつらよまの葉  
十のけりては花の散りては  
の枯れ 六年半はてていふいふいふ

草枯れいふいふいふいふいふ  
野の枯れいふいふいふいふいふ  
はらひつらよまの葉ちる花も散  
風や持申あつら 牛乃 花乃  
あつらよまの葉ちる花も散  
はらひつらよまの葉ちる花も散

夷 漢

あつらよまの葉ちる花も散  
あつらよまの葉ちる花も散

鳥 山 花

乃 花の 葉を 枯用

葉枯れいふいふいふいふいふ  
白 空

露 土 芳

花 散 葉 ちる

十の 葉 ちる 花 散

草 枯れ 野の 枯れ 花 散

夷 漢

白 空







おのゝみや月夜をよみてははる  
雪のつらき公乃らるるまをさか  
鶴鶴 家なきをさるるまをさか  
まの塩やまのぬくまのまのま  
まのまのまのまのまのまのま  
所なまのまのまのまのまのま  
思ひはる雪月夜をよみてははる  
髪利に海をよみてははるまのま  
何れまのまのまのまのまのま

神樂

おのゝみや月夜をよみてははる

鉢をま

史邦 死力 保和 文章 圃吟 支考 諸庫 夕菊 全

食のつらき月夜をよみてははる  
おのゝみや月夜をよみてははる  
無入のつらき月夜をよみてははる  
鶴鶴をよみてははるまのまのま

煉佛 一冊のま

煉佛のつらき月夜をよみてははる  
煉佛のつらき月夜をよみてははる  
すのつらき月夜をよみてははる  
煉佛のつらき月夜をよみてははる  
煉佛のつらき月夜をよみてははる  
煉佛のつらき月夜をよみてははる  
煉佛のつらき月夜をよみてははる  
煉佛のつらき月夜をよみてははる

為美 六 姑圃 疎香 芳逸 同如 惟然 密あ 尚蒙



啓瑞乃し子代のきんちくも伏

歳暮の旨味も亦

ちねのまを造り所をの市に

門抄やまきとちねの改ひ

愛もやしつてもいり年は

積もゆふのりつすめは

大平や親よことらの材

修いられ智ひもいり年

年ひ市待をいりて

井あひまき小豆も市

引信もいりねや色

桶の輪のいりいりし

了併

雪夜

里東

草士

車来

万平

季由

角

正秀

菰子

猿

惟然

天擗も乃しつる

演秋もいり

此の園もいり

のちもいり

けいもいり

知もいり

盗入もいり

南もいり

笑もいり

第もいり

裁もいり

裁もいり

舊

支

土

尚

桃

山

蜂



一 ちきりく啼く鶴の 陰秋の露 利合

雑吟

小庵風の暮夜焼く中火  
煙竹の風の響き一たけの露  
井の氷のあつたふたのまき  
雪の降や山伏村の長はみ  
霜のくもをのちの月と  
火焼く寝るの時の静けさ  
山にや猿の尻捲く夕の  
短坂の冬冬の痕の雪さ  
菊の川やみくぬく世の  
釋教之部 泊邊吉良像

斜枝 上坊 雪下 仙杖 圃仙 雪芝 二谷 沽圃 杉爪

涅槃

涅槃の法はいつき表具も同く  
静かに身を置くか  
山寺や猫守り居る涅槃の像  
貧窮のまををさるる涅槃像

枯圃 芭蕉 不散 山蛭

灌佛

灌佛のつらさある井たのむね  
散るや併らされて二三日  
灌佛の報地は涅槃の像

曲奏 灌佛

言鬼

冷血物もさるる言鬼  
寝るものもさるる言鬼

炭雪 太家



山伏や坊うをやくん魂まう 占圃

甲戌のま大何よはうしをあらう

めさうりやうのうけはれはまて四甲の

帰して益金をいともむとて

家々をなすたふあう後の墓系り 守

守の年二々

まきまや麻木の著りかたを 惟然

その張をあらぬまの子へ飲の風 支考

かまらふりのお守のま

首の伸ハ船毒のするとの何 木翁

まらまや船毒をあらう 楠のあ 支梁

内経清

柳の伸らうのまらうの山経清 占圃

驟

驚かすうて思まらぬ豆け 汗六

らのめれぬのまらうの大味清 如初

雜

常あらう直知のまらうのまらう

用時乃時

まらうのまらうのまらうのまらう 守

け一畑やちのまらうのまらう 乙州

めへのまらうのまらうのまらう 守

まらうのまらうのまらうのまらう 地坡



食草のやまのり 又さくら

支考

旅の部一

送別

之は源十一年の... 送別の歌

勢のり... 別れの歌

唯然

別れのや 柿谷あつら 又の上

唯然

許の... 柿谷あつら

松乃り... 柿谷あつら

芭蕉

留別

落の... 柿谷あつら

菊の... 柿谷あつら

芭蕉

船の... 柿谷あつら

芭蕉

送別の歌

... 送別の歌

葉の... 送別の歌

木常

備の... 送別の歌

越人

舟の... 送別の歌

此後

... 送別の歌

花の... 送別の歌

公羽

舟の... 送別の歌

舟

大の... 送別の歌

... 送別の歌

... 送別の歌

鳥

... 送別の歌

種



明りのいもちりてあれし 往來 我輩  
あや けりて砂のいりて 史邦

圓光のいもちりて 史邦  
史邦のいもちりて 史邦  
我輩のいもちりて 史邦

常陸の國のいもちりて 史邦  
やう東のいもちりて 史邦  
あつて 史邦

時方彩のいもちりて 史邦  
極く 史邦  
その 史邦

之は 史邦

武のいもちりて 史邦

あつて 史邦

宿かつて 史邦

あつて 史邦

千鳥

けあつて 史邦  
史邦のいもちりて 史邦  
唐のいもちりて 史邦  
浦のいもちりて 史邦  
史邦のいもちりて 史邦  
史邦のいもちりて 史邦  
史邦のいもちりて 史邦

貞徳 史邦  
徳元 史邦  
新足 史邦  
伊丹 史邦  
人角 史邦



月の橋ゆくきりみちりふ  
 御嶽の道いららむふかき  
 掃梅の影中を干や破ちりり  
 吹くこの怪き金や破ちりり  
 引波よまをけ髪のかみまて  
 ふちとゆねくおまの世の世  
 種くまの中ぶらまてみちり  
 淋くまの裏あはらむすまをけ  
 文くまのふちふあけく勝ふ  
 方あの新やむのゆあちりり  
 りらあふまはま一やあけしを

長女 徳七 麦秀 金風 和職 昨非 甘泉 之白 月尋 柳水 金聯







